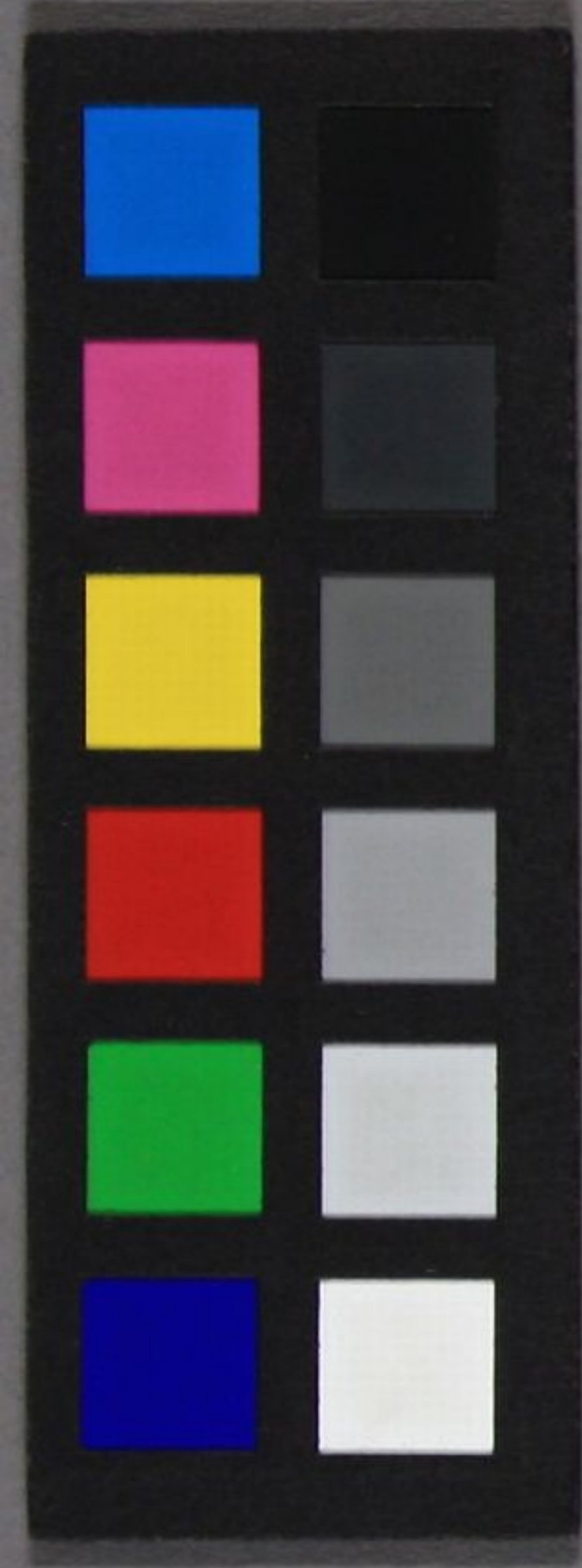
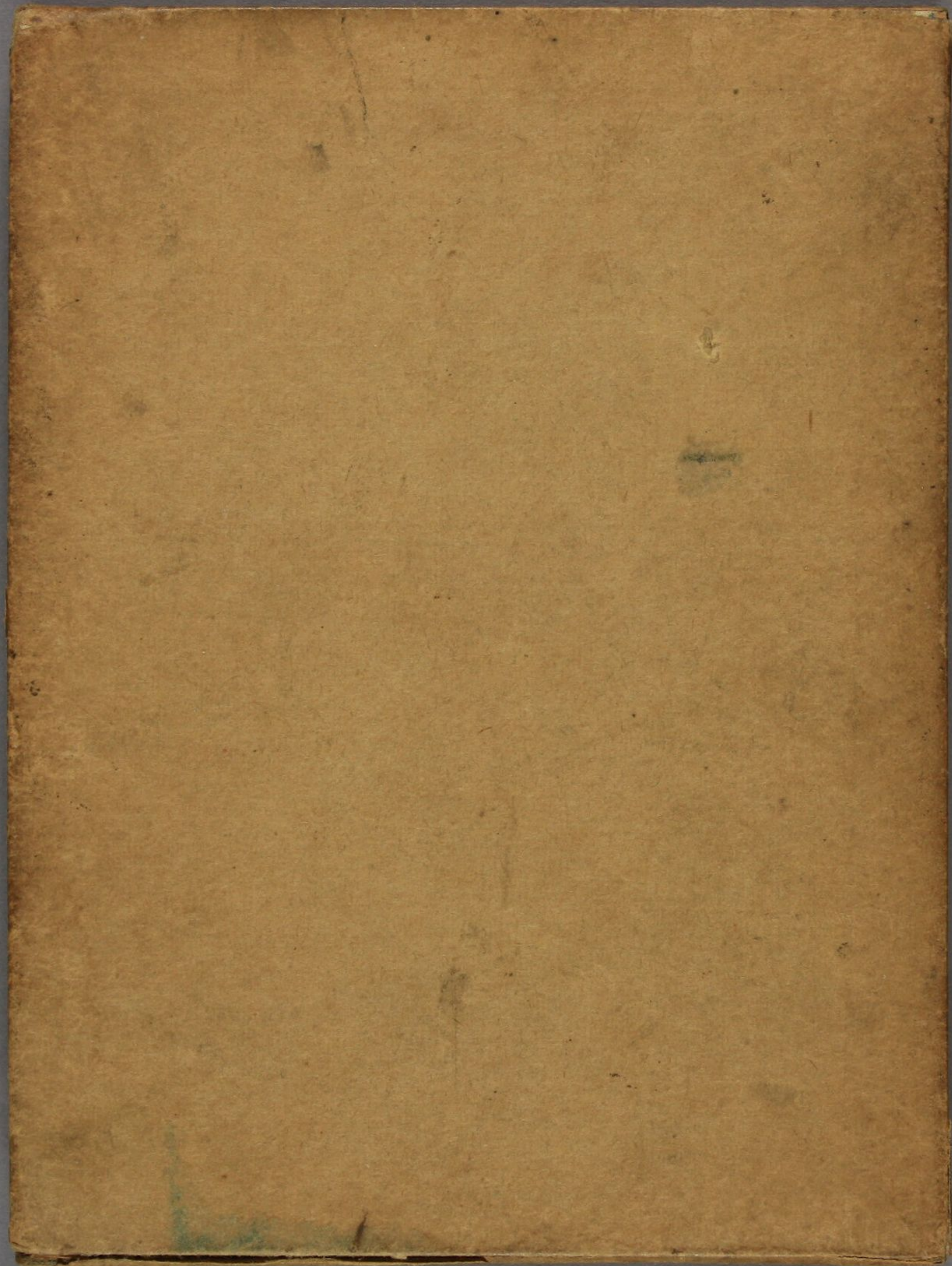


巴里小曲集



巴里小曲集

西條八十著





高

岡

山

集

卷

下

目

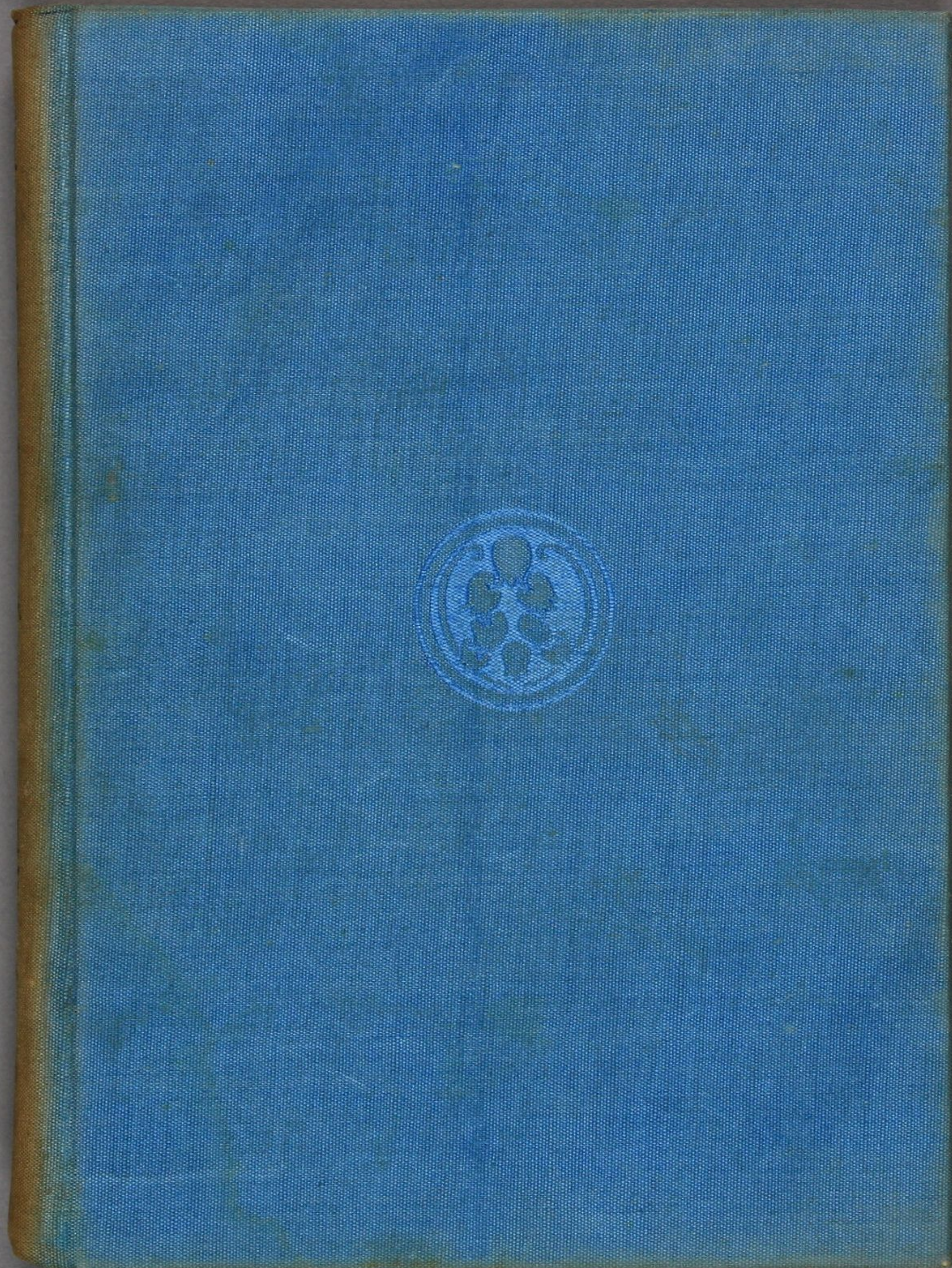
録

上

十

一

〇





西條八十著

巴里小曲集

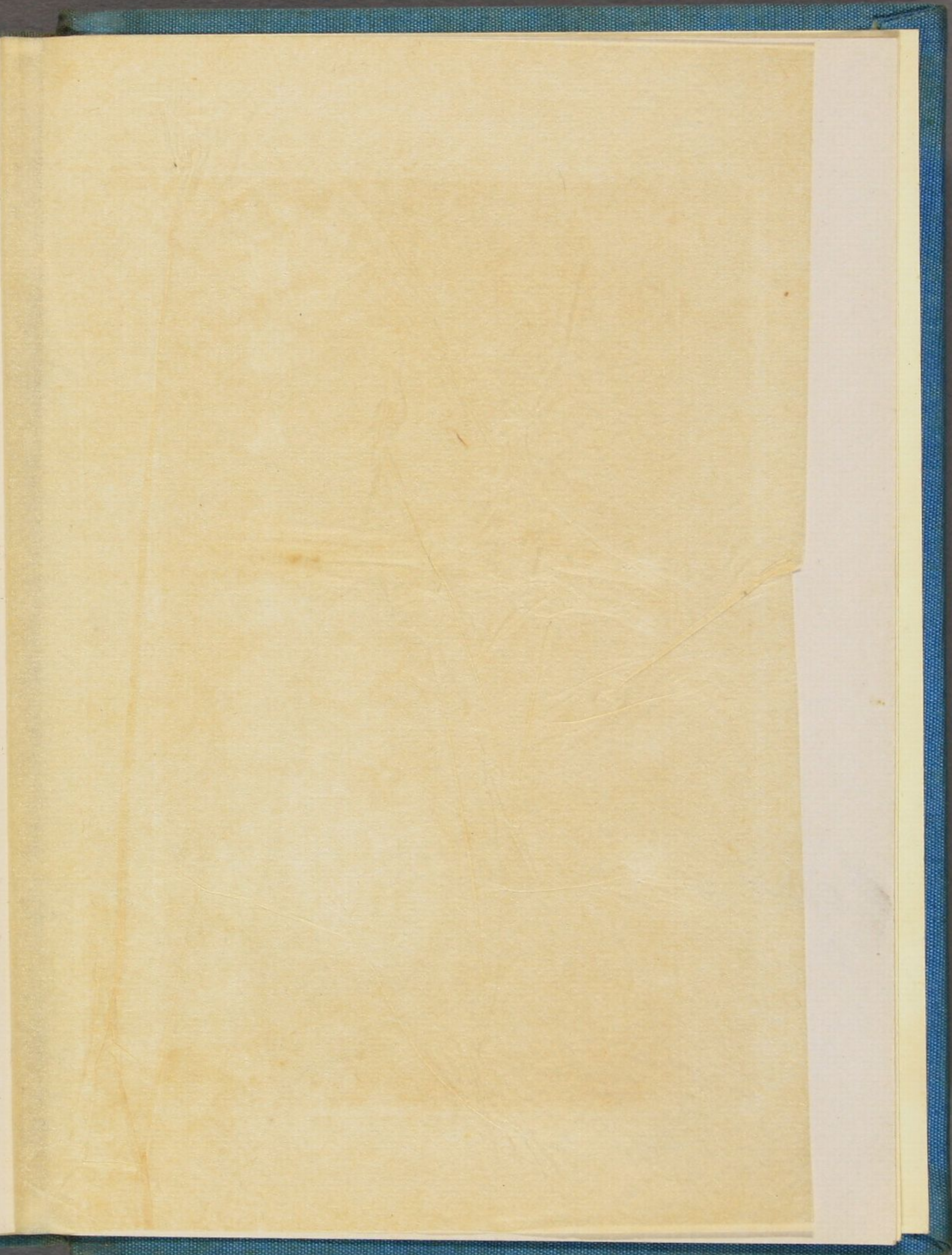
東京交響社

西條八十著

巴里小曲集

東京交蘭社





はしがき

巴里に約一個年半滞在してゐる間に、故國の雑誌からの
依囑で折々書き送つた小さい詩篇を「巴里小曲」と題して
この集に收めた。慌たゞしい旅中、しかも特に若い人たち
のためにといふ條件で書いたものばかりであるが、歸つて
後改めて稿を見ると、さすがに日々親しんだ曇り日のセイ
ヌの流、モンマルトルの丘陵、サン・ミシエルのマロニエの並樹
など眼前に髣髴して新たなる愛着を禁じ得ない。

この意味でこの書物は姿こそ小さいが、私が旅行中各地で求め歸つたささやかな記念品——たとへばオルレアンOrléansの古い城下で獲たジャンヌ・ダルクJeanne d'Arcの銅のメタルのやうに、小さいながら生涯に忘れえぬものとなつて永く私の座右に残るのであらう。

「星と戀」「ゆく春」の中には、「赤き獵衣」以後今日までの私の抒情詩の全部を採録した。

大正十五年三月

著者

巴里小曲集目次

巴里小曲	一
ムードンの丘	三
故國の妹に	七
巴里哀唱	一〇
蝶	一二
サン・デエルマンの森にて	一四
なげき	一六
回想	二〇

菓子と娘……………二四
 二つの言葉……………二七
 故國の君……………三〇
 ルイザに……………三三
 まぼろし……………三六
 デイエプの秋……………三六
 巴里の若者……………三九
 夕日の窓……………四二
 哀しき瞳……………四四
 あるひとに……………四六

山の旅人に……………五一
 セイヌの夜……………五五
 赤い花束……………五九
 黒子に語る……………六三
 巴里の雪……………六六
 唄と乗馬靴……………六九
 異郷哀歌……………七二
 鐘……………七五
 星と戀……………七八
 君が名……………九一

星ゆゑに	六三
哀　　歡	六六
徑	六九
深山のさくら	七二
啞　　雛	七五
う　　は　　さ	七八
くるしき戀	八六
花と灯と人と	九一
涙　　の　　日	九四
狂　　想	九七

別　　後	一〇〇
秋　風　の　中	一〇三
落　　葉	一〇六
謎のこみち	一一八
涙もろき娘	一二一
夢	一二四
通つたひと	一二七
女	一三〇
ゆ　　く　　春	一三三
ねむれる母	一三六

雨夜の汽車	一三八
わらひ	一四三
ゆく春	一四四
三月の電車	一四八
舞踏靴	一五三
可愛ゆき墓	一五五
寮舎の雨	一五六
留守番	一六一
川邊で	一六四
月と母	一六六

山茶花	一七三
姫の一生	一七五
湖畔の悲歌	一七七
雛菊	一八六
見てゐるひこ	一八九

巴里小曲

ムードンの丘

丘をかの上へに

われひとり

たたずみて

空そらを見る。

空青し、

丘の上に

いちはつの

花ひらく。

花つみに

童きたりぬ。

音もなく

草おしわけて。

われ遠く

君をおもふに

かの童

なにを想ふや。

かたはらに

おなじ姿して

はつ夏の

空を眺むる。

故國の妹に

千代紙の鶴をひねもす
折りながら
佗しくわれの歸りをば
待つと告げ來し妹よ。

千代紙の鶴は

千萬折ればとて

飛ばぬ鳥ゆる悲しけれ。

ああ、せめて

ゆく春の夜の幻に

翼にのりて翔りくる

汝を眺めんすべもがな。

月かけ白く、雲遠き、
巴里の宿の欄干に

こよひも兄はひとり佇てるに。——

巴里哀唱

口毎ひごとに馴なれぬ靴くつはけば
足の小指あしをゆびのひそひそと
けふもいとしく痛いたむなり。

青葉あざばの巴里パリの町まちはづれ

路傍みちべの石いしを蹴けるときも
わがふるさとは遠とほきかな。

ああ、曇くもり日ひの静しづかなる
セイヌの岸きしをゆくひとよ、
こはあるまじき日本ひのもとの
君きみにも似にたるうしろかけ。

蝶

わたしは蝶々、
針にさされ、テレピン油を塗られて
標本箱に貼られてゐた。
その苦しみを遁れようと
わざわざ遠い巴里へ來ました。

それなのにわづか一月
わたしはまた針に刺された——
わたしは蝶々、
さみしい、苦しい、戀の蝶々。

サン・ヂェルマンの森にて

われら疲れたれば

森のおくがに

やはらかき草の坐をもとめゆきぬ。

されど春浅き森の下みち

遠くより見れば緑繁にして

近よれば、いづこも草荒れ、土あらはれぬ。

われら三たび、森をめぐりて

空しく去りぬ、

「人の世の幸福も亦かくの如きか」と

呟きつつ。

なげき

—ある年若き畫家に代りて—

「あのひとはお嫁にゆきました、

あれほど固い約束をして來たのに。」

と、呟いたとて

誰が聞いてくれよう。

五月のグラン・ブルーール、

アメリカ人が通る。獨乙人が通る。

「あの人はわたしを裏ぎりました

白い指があんなに誓つたのに。」

と、歎いたとて

誰が知つてくれよう。

眞書のグラン・ブールブール、
土耳其人が通る。伊太利人が通る。

「いまは荒野と化した神戸の埠頭よ、
たつた二年の短かい月日なのに。——」
と、マロニエの樹に力無く倚つたとて
誰が見てくれよう。

巴里のグラン・ブールブール、

印度人が通る。黒人が通る。

回
想

南なん佛ぶつの
齋みねのこ小村むらに
われありぬ、
その日、その夏なつ。

われ三月みづき
日本にっぽん人の
なつかしき言葉ことばを
聞きかず。

あまりにも
寂さびしきときは
ただひとり
森もりと語かたりて、

わが聲こゑの
かへす反響うたがひを
いとせめて
愉たのしみたりき。

南みな佛ぶつの
巒みねのこ小村むらに
孤こ獨どくなりし

その日、その夏なつ。

菓子と娘

お菓子の好きな巴里娘、

ふたり揃へばいそくと

角の菓子屋へ「今日は」。

選る間もおそしエクレール、

腰もかけずにむしやくと
喰べて口拭く巴里娘

残る半は手に持つて
行くは並木か、公園か、
空は五月のみづあさぎ。

人が見ようと笑はうと
小唄まじりで囁りゆく、

ラマルチーヌの銅像の

肩で燕の宙がへり。

*「エクレル」は細長い、シュークリームに似た

菓子で、チョコレートの衣がかけてある。

二つの言葉

フランス
佛蘭西では「さよなら」を

「二通りにいひます、

「Adieu」^{アディエ}と「Au revoir」^{オーレヴォワール}と。

そして、

“Au revoir” はまた近く逢へる人に、
“Adieu” はもう二度と逢へない人にいふ言葉だと
今日先生が教へてくれました。

わたしは遠くにゐるあなたに
念がおしたくなりました、

わたしたちが交したの

“Au revoir” でしたね、

“Adieu” ではありませんでしたね。

先生が歸つたあと

巴里は時雨になりました、

わたしはホテルの二階で

いまたまらなく寂しくなつてゐます。

故國の君

巴里の少女の群にゐて
故國の君をおもふかな。

常春藤寂びたるシヤンティの
古城の苑の秋の日に

褐髪の娘等とうちまじり
フランドールを踊るまも。

こころは哀し、隅田川、
岸の柳に佇みし
かの麻の葉の夢の帯、
その日の君を想ふかな。

ルイザに

わたしの留守に

だまつて来て

だまつて歸つたおまへ。

けれど

その客がおまへだつたことは
戻つたわたしに直ぐとわかつた。

おまへがテーブルの上に残した花束、

それは荒野にだけ咲くほの紅いブルイエール！

あんな淋しい花を好きな少女は、

あんな悲しい花を摘む少女は、

このひろい世に、おお、ルイザ！

おまへで無くて誰が有らう！

まぼろし

うしろ姿すがたがようも似た、
巴里パリの雪ゆきの夕ぐれゆふに。

消きえてはかない淡雪あはゆきの
夜よのまぼろししと知りながら

遠とほい日本にほんに住すむひとを
兩替橋りゅうがしまで追おつてみた。

巴里パリの雪ゆきの夕ぐれゆふに。

ディエープの秋

たゞひとつ、とり残されし林檎の
籠にありて

わが過ぐるディエープの町の
秋は深し。

あをじろき林檎の果を仰ぎて
ふとしも故國なる
かの女を想ふ。

その姿、みぐるしきにあらず、
心根も優しくすなほなるに、
二人の妹に遅れて
なほ老いたる母と住む彼女。
わがふるさを立つ日まで

彼女にはまだ良き縁とて無かりし。

海岸町の寂しき果樹園の

晝をいま過ぎつつ

故國なる彼女の上に

幸あれといのる。

巴里の若者

巴里の若者たちは

傘を持たない、

しめやかな春雨、冷たい時雨が、恣に
かれらの伊達な晴着を濡らす。

はげしい雨がくると
かれらはカンエーに小憩する、
そして晴間を待ちながら
ゆうべ踊場で逢つた
美しい娘のことを夢みる。

容易に雨がやまぬときは
かれらは勇ましく立つて
雨の中を歩きはじめる、

そして、なんとなく悲しいことを想ひながら
マロニエの並木みちを
しみぐと濡れてゆく。

夕日の窓

—ロンドンにて—

夕日の窓の
黄金の髪、
昨日も今日も
うたうたふ。

たそがれ、吾の
疲れて
ひとり家路を
たどるとき。

雲居にちかき
窓なれば
顔は見えず

唄さへも。

さはれ、あやしき

諧調

なにゆゑにかく
身には泌む。

窓に置かれし

花釧の

花の赤きを
見しばかり。

昨日も今日も

黄金の髪、

夕日の中に

うたうたふ。

哀しき瞳

哀しき瞳あり、

海のかなたよりわれを凝視む、
日も夜もわれを凝視む。

眞晝、拉典區の古き街中を歩む時にも、

深夜、ピギヤールの花やげるカフェーの隅に
ものおもふ時にも、

はた、ディエープの濱邊の砂に
子供のごとく匍匐ふ時にも。

哀しき瞳あり、

かのアベルを殺したるカインを追ふ
大空の眼のごとく
つねに、つねに、遠くわれを凝視む。

あるひごに

友の一人は故國から
香たかい海苔を持つてきた、
また一人は春信の錦繪と
赤い舞扇とを。

その中になにひとつ
異國への手土産を持たなかつた私
私が行李の底に秘めたのは
色褪せた昔のひとの寫眞。

長い船路に

友の海苔は香も味も失せてしまつた、
また錦繪と舞扇は
金髪の娘らが争つて奪ひ去つた。

けれど私の行李の底の
この寫眞だけは
いつまでも人知れず残つてゐる、
おそらく永久に盡きぬであらう私の
嘆息とともに。――

山の旅人に

旅人よ
今日もまた
山こえて
いづこへ急ぐ。

瘤だてる
峰の老樹に、
佗ぶなる母を
想はずや。

葉がくれの
櫻鳥の巢に
幼なき子等を
偲はずや。

夕まけて
かへす木霊に
愛ほしの妻を
聞かずや。

旅人よ
あはれ今日も
山こえて

さびしく急ぐ。

セイヌの夜

雨の夜の辻自働車、
若い女の運轉手、
場處はプラス・コンコルド。

„Quelle heure est-il, monsieur ?”

ひとり客の私に

ふとかけた聲、

ふりむく白い面、光る雨。

“Dix heures”

私は答へて、同時に

訊いた彼女の心を覗く。

もう疲れたか、歸る時刻か、

熱いお茶を沸して

母親でも待つてるか、それとも
ほかに待人が。――

“Merci, Monsieur”

こだはらぬ清しい聲、

あとは黙りこくつた女の運轉手、

車は闇をついて走る。

り、り、り、り、り、……セイヌの河岸、

秋だ、さすがに巴里とても虫が啼く。

*詩の中の佛蘭西語の(一)の意味は「何時ですか」
(二)は「十時」(三)は「ありがたうございます」

赤い花束

「あと三十分で

あのひとの十九の歳がゆく。」

大晦日の夜ふけ

巴里の舗石道を歩みながら

外套の襟をたてて、私が呟いた。

「たうとう一刻も見ずにしまつた
あのひとの十九の花の顔が逝く。」
サン・ミシエルの橋のうへで
私は故國の空の方を眺めた、
煙草持つ指さきが、さむく顫へる。

「旦那。花をかつて下さう。
幸福の花です。」

花賣の老婆が寄つてきた。

私は五フランわたしして
その赤い花束を掴んだ、
そして黒い夜のセイヌの水に
無言のまま抛げた。

黒子に語る

夕ゆふべ、われ腕かひなの黒子ほくろに語る。

「小ちさき黒子ほくろよ、

汝なれもこの主人あるじに伴ともなひて

遙々はるか千里りの旅たびを來きたりしことよ。

ヱニスつぎの月つき、ドオバなみの波なみ、

アルプあらしの嵐あらしに

汝なれとても折々をりくは寂さびしかりしならん。」

やがてわれ、聲こゑをひそめて

さらに黒子ほくろにさゝやく、

「されど汝なんぢ、幸福者しあはせものよ、

あはれ吾われにはおんみの如ごとく

伴ともなひ來きたき可愛かほゆきひともありしを。」

巴里の雪

巴里の雪は消える雪、

ゆうべ濡れたは夢ぢややら、

からりと晴れた青空に

ノオトルダムの鐘が鳴る。

巴里の娘はうすなさけ、

ゆうべ逢うたは人形やら、

今日はわき見ても言はぬ

モンマルトルの風車。

唄ご乗馬靴

その女の顔は知らない

私の知つてゐたのは

彼女が毎日馬へ乗ると云ふことだけだ、

夜ふけて戻ると

黒く長い乗馬靴が

きつと扉口に置かれてゐた。

(フェザンドリイ街のホテル

巴里へ来てちやうど三日目。)

彼女の室は私の隣りだつた、

彼女はよく歌をうたつた、

ほがらかな聲で、カルメンのハバネラを、

また或時はしめやかなセレナードを。

巴里は愉しい五月だつた、

私は食堂へ出るたび、数多の卓子に

まだ見ぬ彼女の面影を尋ねた、

山茶花のやうなイギリス娘、

罌粟のやうな佛蘭西娘、

また榭の枝のやうな亞米利加娘の間に。――

けれど絶えてその主をば捉へなかつた。

五月の青葉は日毎

私の窓を悒鬱にした、

日を経て私の知つたものは

つねに扉口の黒く艶々しい乗馬靴と

壁越しの楽しい唄聲とだけであつた。

かくて、それなりで私は

フェザンドリイの宿を去つた。

(巴里へ来てちやうど十日目に。)

異郷哀歌

麴包は無くとも

歌うたふ

旅の男は

黒外套。

戀は知らねど

唄うたふ

宿の娘は

紅き薔薇。

春の夜なれば

しみじみと

二人の胸は

燃えにけり。

されども

辛からき浮うきよ世よがな、

ふたりの熱あつき眼まなざしは

歌うたのあひま間に合あひしのみ。

白しろなめい大理石いしの

階きざし段はしに

月つきの光ひかりのそそぐころ

旅たびの男をとこと

小こ娘むすめは

背そ向むかひに遠とほく

わかれ去さりけり。

鐘

夢見るひまは

異國も

ふるさとなるぞ

楽しけれ。

さめての後に

ひとり嘯む

朝の麴包の

味なさよ。

青葉のうへの

大空は

けふも晴れたり、——

鐘は鳴る。

わが兒の
齡を偲ばせつ
遠く・七つの
鐘は鳴る。

星
と
戀

君が名

草くさにねて

けふもかぞへぬ

なつかしき君きみが名なを。

いくたびか

指を折りて

いやしげく

戀ひしさまさる、

朗らけき君が名よ

いとほしき君が名よ。

草の上へ

夕きたりぬ、

われ涙ぐみ

友よ —

君が名を數へし指に

大空の星をかぞふる。

星ゆゑに

友よ、――

その夜からあの女は

わたしに接吻をくれなくなりました。

静かな夜でした、

紺青の秋空に

星が花輪のやうに燦いてゐました。

わたしは接吻をしながら

愛するひとの肩越しに

いつとなく星を眺めてゐました、

さうして遠い夢に耽りました。

ふと気がつくと、

涙ぐんだ眼が私をぢつと瞞めてゐました、
あのひとの聲が、水のやうに冷たく
耳もとで響きました。

「さよなら。わたしには今夜よく解りました。

あなたがこの私よりも、もつと深く

あの空の星を愛してゐることが。」

その夜から私はもとの淋しい一人になりました、
あの女は二度と接吻をくれなくなりました。

哀

歡

月はまどかに

めぐりゆき

花は音なく

咲きてちる。

静かなる生も

戀あれば

あふるる熱き

なみだかな。

慕へばひとの

月に似て

耀き澄めど

手に遠く、

別れてあれば
雲珠櫻

はかなく色香
うつろひぬ。

静かなる生に

われ生きて

あふるる熱き

なみだかな。

徑

なにゆゑに

われは知る

森かげの

この徑を。

なにゆゑに
われは知る
里とほき
この徑を。

大空の
昨日の星を
仰ぎ見て
涙はてなし。

なにゆゑに
われは知る
ひとすぢの
この徑を。

深山のさくら

深山の奥の櫻木は
人に知られず咲いて散る。

人に知られず散つてゆく、
山の櫻よ、寂しかろ。

あつい乙女の胸の火も
親の涙に消えてゆく。

人に語らずあきらめて
嫁ぐ乙女よ、悲しかろ。

啞

雛

その一言が

ききたさに

けふも忍んで

きたものを。

あひも變らぬ

啞雛の

なまじ眼もとの

うつくしさ。

その一言が

ききたさに

けふもかうして

きたものを。

う
は
さ

それはうはさと
いふものよ。

花はながさいても
ひとのいふ、

鳥とりがとんでも
ひとのいふ、

それはうはさと
いふものよ。

くるしき戀

くるしき時は
庭に出で
君がみ名など
呼びてみぬ。

明しかねたる
戀ゆゑに
身もたましひも
瘦せゆくか。

よわき女の
絞るなる
涙こぼれて
わが庭に、

昨日もけふも

くれなゐに

爪紅の花

咲きにけり。

花ご灯ご人ご

眞畫の丘には

花が咲いてゐた、

百も千も。――

けれど、私の摘んだのは

たつたひとつ。

黄昏^{たそが}れて、町^{まち}には
灯^ひがともつた、

百も千も。――

けれど、私^{わたし}の見^みつめるものは
たつたひとつ。

あの町^{まち}には

人^{ひと}が住^すんでゐる。

百も千も。――

けれど、私^{わたし}を待^まつひとは
たつたひとり。

涙
の
日

涙なみだながれて

やまぬ日は

涙なみだに君きみが

名なをかきぬ。

書めけどはかなき

文字もじながら

なぜにかくまで

懐なつかしき。

涙なみだに腫はれし

眼めをあけて

今日けふも暮くると

眺ながむれば。

かの夕空の
鴛さへも
翼に君が
名を書きぬ。

狂
想

七日七夜
君が門邊に待てど
君來らざれば、わが心
狂しうなりぬ。

幼き日

籠の瓢哥を焚きしごとく

君が館に

こよひ紅蓮の火を放たむ。

月かげに

花吹雪する庭面。

君が白き柔肌を縛め

生きながら熱き焔もて灸らむ。

七日七夜

君來らざれば

わが心いま

おそろしき夢を見そめぬ。

別

後

丘をにのほれば
花はなありぬ、
君きみとつみたる
青あをき花はな。

丘をを下くだれば
海うみありぬ
君きみとあそびし
夏なつの海うみ。

野のにも山やまにも
落おちち散ちれる
昨きのふ日の夢ゆめの、
くるしさに、

家にもどれば
文箱に
裂きてのこれる
君が文。

秋風の中

秋風吹きて、月ほそし、
妹よ、この宵は
クラリネットを吹きたまへ。

銀のクラリネットの

音につれて

ただひとすぢに偲びたし

昔のゆめを、過ぎし日を。

美しく夕化粧して

秋風の窓に立つ

うら若き妹よ。

この宵は、疲れたる姉のため、

ピアノをやめてひとすぢに
クラリネットを吹きたまへ。

落葉

秋風のゆふべの庭に
おもふこと。——

落葉にまじり眠りたし、
落葉とともに一夜を

涙ながして語りたし、
返らぬ春を若き日を。

謎のこみち

現とも夢ともわかず

いぶかしき徑を見たり。

その徑は花にかざられ、

その徑は鳥の音にみち、

あだめきて心を惹けど

見ぬおくぞはかり知られぬ。

ああ、されど友の足あと

草の上にあまた残るに、

われとても分け入り見たく

うち案じしばし躊躇ふ。

「母ははびとも教をしへたまはぬ
美うつくしき謎なぞのこみちよ、

いづくよりいづくへゆく」と
佇たずみつ、われの嘆なげてば、

大空おほそらをゆく風かぜありて

哀かなしくも「戀こひ」とこたへぬ。

涙もろき娘

涙なみだもろき娘こは

けふも涙なみだを見みせつ、

言葉ことば寡さびに別わかれゆきけり。

丘かにのぼり見みる

涙なみだもろき娘このうしろかけ。

とほくと、光ひかれる水みづを越こえ、

芒すいの徑こみちをめぐり、

さみしげに野菊のぎくなど摘つみつ。

涙なみだもろき娘このうしろかけ

やうやうに消きゆるころ、

わが吐とい息いきとともに

穂ほ芒いに月つきいでにけり。

夢

さみしきものを
われは見ぬ、
あかつき、君の
ねむるとき。

かたく互に
擁きても
離るる心の
すべなさよ。

二人ひとつに
寝ねながら
君の夢さへ
はかられね。

さみしきものを

われは見ぬ、

あかつき

君が横顔に。

通つたひこ (Hélène Vacaresco)

そのひとは通りました、

わたしは途へ出ては

いけなかつたのです、

けれど、わたしの家は途に沿ひ、

わたしは手に花を持ってゐたんですもの。

あの人は話しかけました、

わたしはその聲に酔つてはいけなかつたのです、

けれど、私の窓には朝の陽がみち

森のなかには四月だつたのですもの。

あの人はわたしを想ひました、

わたしはさう迅く人を愛してはいけなかつたのです、

けれど、耳傾けた心は

きつとまた答へるのですもの。

あの人は立ち去りました、

わたしは二度とあの人に逢はうとしてはならないのです、

けれど、あしたも四月の陽がのほりませう、

そしてあの人が居なければこの世は暗いのです。

女 (Evelyn Underhill)

わたしは彼女とアンブライアンの丘で逢つた、
髪はみだれ、足は素足で、
けれどひそかな榮光にみたされてゐるかのやう、
彼女は歩いてゐた、神と偕に。

わたしは彼女と街の通りで逢つた、
ああ、何といふ變りやう！
重たい目つきと、疲れた足で、
彼女はひとり歩いてゐた、人と偕に。

ゆ

く

春

ねむれる母

母ははびとの

午ひるね睡さみしや

庭にはにさく

ちぢさゐの花はな。

安^{やす}らけく

ほほゑみたまふ

口^{くち}もとの

小^{ちひ}さき黒^{ほくろ}子。

はらからを

あまた育^{そだ}てて

わが母^{はは}も

老^おいたまひけり。

うち眺^{なが}め

悲^{かな}し、たふとし、

天^{あめ}地^{つち}に

一^{ひとり}人なるひと。

雨夜の汽車

雨の夜ふけの
汽車の音は
かなし、懐し
身にぞ沁む。

いかなるひとの
この夜半に
はるばる旅を
ゆくならむ。

われはも
母のふところに
安くねむりて
あるものを。

赤き信號燈

草の丘

ながき線路に

しぶく雨。――

雨の夜ふけの

汽車の音は

消えたるあとも

なほさみし。

わ
ら
ひ

私はあなたの笑ふのを見るのが好きです。

あなたが笑ふとき

白いきれいな歯並はなみが

私には大理石だいりせきの石垣いしがきのやうに見えます、

さうして、そのうしろの可愛い舌したが

真紅まつかに咲いた薔薇ばらの花園はなをののやうに見えます。

私わたしはその石垣いしがきの外そとにギタールギターを弾ひいてさまよふ

若い、雄々をいしい騎士きしを想おもひます、それから

薔薇ばらの花園はなをのの中でそれに耳澄み、すませてゐる

美しいお城しろの姫ひめを、

あなたの笑わらはいつも私わたしに楽しい夢ゆめを與あたへます、

私はあなたの笑ふのを見るのが好きです。

ゆ
く
春

くるし、可愛し、泣かまほし、
日記をとりて認めぬ。

散りし櫻に雨ふりて
少女の春のゆく夜なり。

銀の手函も、文鼓も、
鸚鵡の籠もみな裂きて
せめては紅き火を焚かん。

くるし、懐かし、泣かまほし、
少女の春のゆく夜なり。

散りし櫻に雨ふりて

返らぬ春のゆく夜なり。

三月の電車

可愛い少女たちよ、

昨日今日の電車の中の

あなた達のこの静けさはどうしたと云ふのであるか。

私が日々の散歩に

この時刻の郊外電車を選ぶのは

学校がへりのあなた達の

明るい笑聲を聞きたいばかりなのだ。

みじかいスカート、長い胡蝶のやうな袂

あなた達は花吹雪のやうに

車内に亂れ入ってくる、

時には卵を抱く母鳥のやうに、めい／＼毛糸の球を大切にかけ、
時には雄々しくラケットを持って、その美しい額髪を汗ばませてゐる、

さうしてあなた達は一言を語る毎に笑ひどよめき
車内に華やかな夢を、光を撒きちらす。

それなのに、

昨日今日のあなた達の變りやうはどうしたと云ふのであるか、
誰も石のやうに冷たく黙り込んで、
つつましく膝の上のライダアの頁を繰り、
或は氣むづかしく眉をひそめて
細かいノオトの文字に見入つてゐる、

あなた達は急に老人に、さうして
電車の中は急に墓場になつたやうだ。

可愛い少女たちよ、

昨日今日のあなた達の姿は

この貧しい詩人の日に一度の散歩を堪えがたいものにする。

ああ、華やかな小鳥たちの悉く口籠をされた、
三月の試験期の電車のさびしさよ！

舞踏靴

雪の降る夜に失ひし
紅くちひさき舞踏靴、
幽かに見えて月魄の
おぼろに入りし舞踏靴。

ふくらの頸巻の貴婦人は
並木の路をいくかへり、
馬車を廻らせ、さて暫時、
樹間の月にうかゞへど。

黒き夜の市街、遠き町、
風のつたふる顫音は
花毛氈に零れたる
ウォルツの曲か、懐たし。

忘れかねては貴婦人の
涙ぐみつゝ尋ねゆく、
雪の夜みちに失ひし
紅くちひさき舞踏靴。

可愛ゆき墓

蒲公英を摘みて
のぼれる丘の上に
古りて小さき墓ひとつ。

小鳥の塚か、美き稚兒か、

あまり可愛ゆき
石のさま。

雲雀にきけど
名を知らず、
空ゆく雲も答へねば。

心づくしの
蒲公英の

花をかざりて戻りけり。

寮舎の雨

いつまでやまぬ

秋の雨、

寮舎の夜の

こほろぎよ。

こころ淋しく

縁にいで

涙する子は

誰ならむ。

かなたの窓の

友の影、

わがなつかしの

母に似て。

寮舎れうしゃの夜よるの

こほろぎに

いつまでやまぬ

秋あきの雨あめ。

留 守 番

庭にはの櫻さくらの樹きの下したで

ひとり紅茶こうちゃをいれて飲のむ

春はるの留守番留守ばんさみしいな。

みんなは今頃いまごろ

浅草で

活動寫眞を見てるだろ。

本も雑誌も

読み飽きた、

鳥も啼かないお晝すぎ。

ひとりで切れば

カステラの

甘ひ匂よ、日の永さ。

青い櫻の葉がくれに

のぞくは白い晝の月、

春の留守番さみしいな。

川邊で

ゆらり、ゆらり、と

ながれくる

姿すがたやさしい

櫻草さくらさく

どんな子供こどもが

川上がみで、

摘つんで、あそんで

捨すてたやら。

丈たけもみぢかく

色いろあさく

まだ若わかい身みで

あるものを。

空にかなしく
鳴きかはす
雲雀の聲に
送られて、

ゆらり、ゆらり、と
夕ぐれの
川をながれる

櫻草

月
こ
母

やさしきものはよるのつき
とはにもくらぬひとすぢの
きよきひかりをはなちつ
わがよのはてをてらしゆく。

たふときものはうみのはは
いつもかはらぬひとすぢの
みむねのあいにもりつつ
われらのためにいきたまふ。
ふかきまよひにあるときも
つきのおもてをながむれば
さぎりははれてほがらけき
むかしにかへるこちすれ。

あらぬなやみのせむるひも
ははのみこゑをきくときは
なやみはきえてそのかみの
きよきころぞわきいづる。

ああわがともはつきとはは
ははとつきとにみちびかれ
きよけきみちをたどるこそ

をとめのわれのねがひなれ。

山茶花

山茶花のかをりをきけば

偲ばるる

すぎし昔のわが友よ。

寄宿舍の小春の縁に膝ならべ

色とりどりの編物の

針はこばせしわが友よ。

あるひは嫁ぎ

あるは逝き

消息もたえて

山茶花のはかなきごとく

ありぐに

なりし昔むかしのわが友ともよ

姫の一生

幼こいころのお姫ひめさま

おめしになるは乳母うはは車くるま

笑わらへば可愛かほい片かたゑくほ

ちんちろ、驢馬ろばの鈴すずが鳴なる。

お身丈ものびてお姫さま
おめしになるは花の轎、
三國一の嫁ごれう
お供の唄が晴れくくと。

お年を老つたお姫さま
おめしになるは黒の馬車、
今日もさみしく墓詣
ながい登道、雨がふる。

湖畔の悲歌

——最賀龜代嬢の靈に献ぐ——

龜代さん、——
寂しい片山津の湖畔の草に坐して
旅人の私がいまあなたの名を呼ぶ。

聞えますか、龜代さん。

この山間に美しく光る湖水のやうに

昨日までは私に未知の人であつたあなた、

さうして今では私の腕に

かくも強く、深く、その名を刻まれたあなた。

龜代さん、――

私はずひにあなたを知らずに終つた、

あなたの美しい倂も、優しい姿も、また

その清らかな聲音も。――

あなたはあまりに性急に、

私の機をも待たでこの世を逝られた。

いま私は寂しい石像彫刻師のやうに

昨日も今日もこの草かげに坐して

あなたに就て聞いたさままな譚から

瑪利亞のやうに清き、昔のあなたの像を

わづかに捏り出づるばかりである、

憂々と胸の中に響く、小さき鑿の音の幽けさよ！

十三の幼い日に、あの可憐な櫻草の歌を書かれたあなた、
つねにピンクの薔薇を愛されたあなた、

さうして、いつも春の日のやうに明るく、快活でゐながら、

しかも雛粟のやうに情に脆く、

病の床にも父母の身を氣づかひ

その弟妹をかぎりない愛の光に包みつつ、逝かれたと聞くあなた、

私はそれらの小さい輝く追憶の破片を

一々情熱もて接ぎ合せて

この草蔭に出来るだけ完全に、あなたの姿を眺めようとする、

けれども、あまりに儂かりし美少女の一生に、

私は折々鑿持つ手を休めて

あふれ出づる熱涙を拭ふを禁めがたい。

龜代さん、——

いま湖の上には

白く塗られた四五艘のボートが浮んでゐる、

病中水枕の音にさへ

過ぎし海邊生活を楽しく回想されたと聞くあなた、
そのあなたと私が、

せめて一度あのボートに乗ることを

運命は許してくれないであらうか、

もしもさうした幸の日が許されるならば

私は舳に立つて、あなたが愛されたと聞く私の詩の幾節を
聲かぎりあなたのために吟ずるであらう、

さうして、快活なあなたは、自ら權をとつて、

楽しく舟を湖心へと進ませるであらうに。

既往は追へどもかひない、

私の涙はただ空しく湖畔の草をぬらす、

仰げば天空に弧を描いて

一羽の鳥がゆく、

それはさながら、地上に惱める魂を噴ふ
君の快活にして高貴なる靈のごとく、

澄みわたつた初冬の碧空を

高く、高く、どこまでも翔つてゆく。

附記

梶賀龜代さんは私にとつて未知の少女であつた。嬢が私の作品を熱愛して居られたといふことは、その死後になつて初めて御両親の口から私に傳へられた。わづか十七歳の花の蕾で儚なく夭折された嬢に、生前相見ゆる機を持たなかつたことは千秋の恨事であつた。私は寫眞を通じてわづかに嬢の美しくまた神々しい死容に接することを得た。

その倂を旅中幾度か想ひうかべつゝ、加賀國片山津の名も知ら

ぬ湖のほとりで、私はこの悲しい歌を書いた。

さくら草、小さい人のおあつまり、何を話してゐるか聞きたい。

(十三の頃書かれた龜代さんの歌)

雛

菊 (Bliss Carman)

夜ねむるとき

わたしは頭の上に

星が輝いてゐるのを見ます。

星は夜の牧場を綴る

白い、可愛い雛菊の花です。

さう想ふとき、また私は

月が空をゆくのを見ます。

それは遠くから雛菊を摘みにきた

優しい、美しい女のやうです。

朝、起き出て見ると

空にはひとつの星も残つてゐません、

わかりました。

あの人^{ひと}がのこらす摘^つんじ、
地^ちの上^{うえ}の牧場^{まきば}へと撒^まいたのです。

見てゐるひご (Margaret Widdemer)

その女^{おんな}はいつも
私^{わたし}たちを眺^{なが}めてゐる、
歸^{かへ}りが遅^{おそ}れやしないかと、
冬^{ふゆ}は窓^{まど}に慍^より、夏^{なつ}は門^{かど}に出^でて。

あんまり心配しすぎるので

私たちは笑つて見なくなる。

けれどもその女が待つてゐるゆゑに

長い歸りみちも氣やすく歩まれる。

その女の心は私たちのことで充ち、

片時も忘れない。

いつどこにゐる時でも

きつと私たちを見つめてゐる。

ちやんと家へ戻りつくまで

もし遅れやしないかと氣づかつて

その女は私たちを眺めてゐる、

天の窓に凭り、天の門に立つて。

*見てゐるひととは云ふまでもなく、つねに正しい道を歩むやう、大空から私たちをやさしく見守つてゐて下さる神さまのこゝです。

大正十五年四月一日印刷
大正十五年四月十日發行

巴里小曲集

不許複製



定價壹圓四拾錢

著作者 西條八十

發行者 飯尾謙藏

東京市神田區南神保町十六番地

印刷者 近藤喜七

東京市芝區櫻川町二番地

發行所

東京市神田區南神保町十六番地
交蘭社

電話四谷
六八四二

振替東京四〇二七九番

交蘭社發行の高評書類

水谷先生著	少女詩の作り方	送料八十三錢
西條八生著	小曲集 靜かなる眉	送料九十三錢
水谷先生著	小曲集 寶石の夢	送料九十五錢
落谷虹生著	虹兒畫譜 悲しき微笑	送料一圓九十七錢
生田春生著	小曲集 春の序曲	送料九十五錢
竹久夢生著	詩集 青い小徑	送料九十六錢
西條八生著	散文詩集 噫 東京	送料一圓二十五錢
落谷虹生著	小曲集 夢の跡	送料四十五錢

交蘭社發行の高評書類

荻原井泉著	俳句の新いし味ひ方	送料一圓九拾八錢
西條八生著	新しい詩の味ひ方	送料一圓六拾八錢
落谷虹生著	虹兒畫譜 睡蓮の夢	送料一圓七拾六錢
吉屋信子著	創作 古き哀愁	送料一圓四拾五錢
西條八生著	詩集 砂金	送料一圓七拾七錢
水谷先生著	詩集 水色の花	送料一圓五拾五錢
間司つね著	詩集 夜の薔薇	送料一圓三拾五錢
野口雨生著	童謠 作方問答	送料一圓二拾五錢

先吉屋信子著 散文詩集 憧れ知る頃 送料一圓四十五錢	先幡谷正雄譯 ゲエテ小曲集 送料一圓十二錢	先下田惟直著 小曲詩集 胸より胸に 送料一圓三十五錢	先生田春月著 ハイネ小曲集 送料一圓十二錢	先生條八十著 現代抒情 小曲選集 送料一圓四十五錢	井上、編 近代名家抒情詩集 送料一圓四十五錢	藤村、八十、羅風、春月、夢二、雨情、まさる、虹兒、惟直、柳虹、犀星、省吾、正夫、香月、至大、まさる、汪洋、宗治、秀夫、外二十四名家の最も優れたる小曲詩篇を選出して一巻となし、後より來たる若き人々にその範を垂れたる稀に見る小曲一大詩集である。加ふるに各詩人の寫眞と小傳を附して遺憾なきを期したるもの。
--	------------------------------------	--	------------------------------------	---	-------------------------------------	---

先吉屋信子著 第一第二第三第四 花物語 各送一圓三十七錢	先西村醉香著 歌物語 送料一圓三十六錢	先吉屋信子著 長篇小説 屋根の二處女 送料二圓二十錢	先萩原井泉著 吾が小さき泉より 送料一圓七十八錢	先路谷虹兒著 私の畫集 送料一圓二十五錢	先加藤長江著 音樂常識辭典 送料一圓三十五錢	テニス、原長イノック・アーデン(全) 送料一圓三十五錢 ▼歐米全國民の熱狂的好評を得たる本書、人として誰人か涙無しに本書を繙かむや、東西人情に異なるなし、美しき愛、清き熱情、親子の情、偉大な人格、噫、テニス、死して幾年、されどイノック・アーデンは今猶全世界に炳呼として人類愛を示せり。家庭の必備書として今や本書を知らざる者海外に無しと評さ
--	----------------------------------	--	---------------------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	--

著名二るたれさ賣發々愈

〇〇 關口晃南氏譯著

四六版布製
箱入美本

定價一圓五十錢
送料十六錢

新刊 やさしい 英詩の學び方

英詩研究の初等用として中女學校三四年生の諸君が多年欲求せられし本書はいよ／＼諸君の机上に飾られむとしてゐる。是非一巻を座右に備えて原詩の味讀あらん事を御薦めする著書は英國學士として錚々たる語學者で有る。

〇〇 間司つねみ氏著

中形總編
特美箱入

定價一圓三十錢
送料十四錢

新刊 小集 海のほとり

果敢なく暮れ逝くうら若き日のかたみにとて再び返らぬ思ひ出を詠つた甘美な小曲の中から特に優しい調べのものゝみを數多選び是に五味氏が抒情畫八葉を描き加へたる美しき小曲詩集である當代稀に見る好詩篇と評されてゐる。

東京市神田區 交蘭社 振替口座 〇二七九番

SHOBUNDO
田神 京東
店書堂文尚